



神話の時代

1月28日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

1月28日のおはなし「神話の時代」

そのリストランテは高台の上にあった。

急坂にしがみつくとよくなるまを転がし、ようやく登りきれそうな場所に店はあった。お客さんがわざわざ徒歩で訪れることなど考えられなかった。まわりは住宅ばかりで他に店があるわけではなく、特に見るべきものが近くにあるわけでもなく、ぶらぶら散策するのに向いた場所でもない。それなのに店には駐車スペースがなく、店の利用者がどうしていたのか、いまとなっては調べようもない。店についてわからずじまいなことはそれだけではなかった。

店の名前は「リストランテ・タッペツェリーア」。タペストリーのレストランという意味らしいが、一体それが何を意味するのか、子どものころのぼくに確かめる術はなかった。タッペツェリーアがタペストリーという意味だと知ったのだから、もっとずっと後のことだし、仮にその時点でそう聞かされていたとしても小学生の頃のぼくにはタペストリーが織物の壁掛けだということもわからなかったし、仮にそう説明されたとしても、壁掛けなんて見たことがなかったし、そもそもどうして織物なんかを壁飾りに使うのか見当もつかなかったはずだ。

正直に告白すると、いまだって見当がつくわけではない。織物を壁飾りにするような知り合いはいないし、そんなことをしている家を見たこともない。ただヨーロッパ辺りの貴族や金持ちが広大な屋敷の装飾としてそういうことをしていたらしいと聞き知るのみだ。小学生のぼくは「タッペツェリーア」という音の連想から単純に、「食べる場所」くらいの意味だと思っていたのだが、リストランテがレストランのことだと誰かが教えてくれたからは、すっかり混乱してしまった。だってそうだと「リストランテ」も「タッペツェリーア」も「食べる場所」という意味になってしまうからだ。

ぼくらは、ぼくとマサヤとヨシオの三人は、しばしばリストランテ・タッペツェリーアの敷地内に侵入した。なぜならそこは少年たちにとって実に魅力的な、秘密めいた場所だったからだ。門はいつも開け放たれ、奥に見える洋館までは砂利を敷き詰めた道が続き、その両脇にはこんもりとした植栽が迫っていた。道はそのまま建物の前面の車寄せに続くのだが、建物の右手に回り込むと驚くべきことにそこには橋が架かり、下を小さな溪流が流れていた。橋を渡ると建物の裏手に続く庭になるのだが、いったんその奥の森に踏み込めば、もう誰からも見とがめられる心配はなかった。

近所の悪童どもがそうやって公園代わりに利用していたことをリストランテの人が知っていたのかどうか、ぼくらにはわからない。なぜなら昼間ぼくらが訪れるときにはいつだってドアは締め切られており、建物には全く人の気配がなかったからだ。ドアの前には準備中を意味するらしいイタリア語の書かれた札がかかっていた。ぼくらはこっそり門柱の脇をかすめ、木立に沿って建物の右手に回り込み、そのまま庭の奥の森の中に駆け込んで身を隠した。自転車で走り回ったり、野球やサッカーをすることに夢中だったぼくらをそこまで惹き付けた理由は、一頭の子馬だった。

その子馬は森の中に放し飼いにされていた。初めて見つけたときには仰天したが、子馬の方はぼくらを見かけても逃げもせず、むしろ好奇心いっぱい近づいてきた。全身まっ白で、首を伸ばしても大人の背丈ほどしかなく、額の部分が少し隆起していてまるで角でも生えてきそうに見えた。子馬とぼくらはたちまち仲良くなった。教えたわけでもないのに子馬は鬼ごっこやかくれんぼに参加した。あんなに輝かしい純白の毛並みのくせに、かくれんぼをする時の子馬は絶対に見つからなかった。ぼくらが降参だと言って初めて姿を現すのだが、それはまるで何も無い空間に突然滲み出してくるよう見えた。

一度こんなことがあった。鬼ごっこの途中でヨシオが転んで怪我をした。膝のあたりを尖った枝かなにかに引っ掛けて切ってしまったのか、血がたくさん流れた。ヨシオは身体を起こした姿勢で膝を見て、声も出せずにぼろぼろ涙を流して痛がった。それを見てぼくなどは文字通り足が

すくんでしまったくらいだ。子馬はゆっくり近づくとそっと傷口を舐めた。きつとしばらくそうしていたのだと思うが、気がつくともよシオの膝の血は止まり、傷口もきれいに塞がっていた。ぼくらはそれを奇跡だといい、子馬の首をみんなで撫でてほめた。

ヨシオの怪我だけではない。子馬についてぼくらはそれぞれに特別な思い出がある。マサヤは一度子馬の背に乗せてもらったことがある。それはマサヤだけの体験だ。ぼくはあるとき子馬からプレゼントをもらった。それはレストランの厨房からくすねてきたらしいコック帽だった。いたずら好きなぼくらは大笑いして子馬の手柄をほめたものだった。刺繍で縫い込まれたカッペッコという文字を人の名前だと思い、ぼくらは長らくカッペッコさんも気の毒になんて話していたが、後に調べたところ、それはイタリア語でただ「帽子」という意味だった。

こんな話を書いたのは、タベ、ネットのニュースに、そのレストランの話題が出ていたからだ。レストランはとくに閉店してしまっていたらしく、建物がどこかの企業に引き取られたという話だった。今後、一般人は入れないようになってしまうが、建物には文化財的価値が高く、特にそのタペストリーは注目に値すると紹介され、写真が出ていた。写真のサムネイルをクリックして拡大表示すると、タペストリーの中央には純白のユニコーンの姿があった。そしてその周りにはたわむれる3人の少年たち。

ぼくは妻を呼び、パソコンの画面を示し、ざっと話をした。妻はにっこり笑って、お客さんが来る前にあんまりワインを飲んじゃダメよと言い、客席のテーブルセッティングに戻った。ワインなんか飲んでないよ、まだ2杯しか。ぼくが言うとフロアから笑い声が聞こえた。ぼくはコック帽をかぶり厨房に入った。さあレストラン・カッペッコの開店時間だ。

(「レストラン」) ordered by Dr.T-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

● [「SFPインデックス」](#)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

神話の時代

<http://p.booklog.jp/book/43141>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/43141>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/43141>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.